

農業を巡る 厳しい現状とは？

農業を取り巻く環境は、かつてないほど厳しい状況にあります。農家戸数の減少や生産者の高齢化、農産物価格の低迷に加え、平成13年のBSE(牛海綿状脳症)問題に端を発した一連の農畜産物問題や食品の偽造表示事件、輸入農産物の残留農薬問題、さらには、WTO(世界貿易機関)の農業交渉における関税引き下げ要求など、抱える問題はいずれも深刻です。

8人の エコファーマーたち

しかしながら、こうした逆境をバネに立ち上がる人たちもいます。その一つ、「高岡施設園芸生産組合」は、組合員である8人全員が「エコファーマー」という団体が「エコファーマー」とは、「持続性の高い農業生産方式の導入の促進に関する法律(持続農業法・平成11年制定)に基づき、それを実践する生産者に与えられた称号です。「土づくり」「化学肥料削減」「農薬削減」の3つの技術を組み



8月7日に行われたJAいしかり青年部主催の「農業体験ミステリーバスツアー」

合わせて環境保全型農業を目指す生産者に対して都道府県知事が認定するもので、今年3月末現在、全国で47、766件、北海道では656件が認定。石狩支庁管内では平成14年6月に、高岡施設園芸生産組合の8人が初めて認定されました。

同組合が取り組むのはミニトマト栽培です。畑地かんがい事業で高岡地区にかんがい施設が整備されたことがきっかけで、「せっかく水が来るならハウスを作って、雨の日でも収穫できるものを何か作ろう」という話になった



JAいしかり地物市場の陳列棚には、生産者の顔写真入りで紹介しています

私たちが「つくっています」 いしかりの農業

土に触れ、食に関心を 持つてもらえれば…

8月7日土曜日。夏休み真っただ中のこの日、市内に住む15組の親子を乗せた1台のバスが向かった先は、広大なジャガイモ畑でした。バスから降りた子どもたちは皆、長靴に軍手姿で準備万端。30度を超す暑さの中、さっそく元気にイモ掘りが始まりました。

これは、JAいしかり青年部が毎年企画している『農業体験ミス

テリーバスツアー』の一場面です。ミステリーだけでなくこれ以上は「秘密」ですが、30分にわたって行われたイモ掘りでは、子どもたちの表情が楽しむというより、むしろ真剣そのものだったことに強い印象を受けました。

「土に触れることで、食料の大切さを知ってもらおう」と始まった同ツアーも、今年で8回目。毎年、目を輝かせながら土と戯れる子どもたちの姿に、JAいしかり青年部のメンバーは「やって良かった！」と、胸を熱くするといいます。イモ掘りを終えた子どもたち

「面白かった？」と尋ねると、「もつとやりたい！」とすぐに元気な答えが返ってきました。「この収穫体験を通して、自分たちの食べるものや、自分が暮らすまちで食べ物を作っていることにもっと関心をもってもらえればうれしいですね」と、松本文男JAいしかり青年部部长は目を細めながら語ってくれました。

《石狩市で作られているおもな作物》

平成15年 石狩市農業協同組合・サツラク農業協同組合調べ



「応援しています」

を支える力

生産者と消費者、思いは一緒です。

「安心、安全なものを子どもたちに食べさせたい」

「新鮮で、旬のおいしいものを味わいたい」

そんな声が多く聞かれるようになりました。

生きることは、食べることもいえます。

まちには、食の大切さにいち早く気づいて立ち上がった生産者と消費者がいます。

今回は「農業」に注目し、

食への真剣な取り組みをご紹介します。